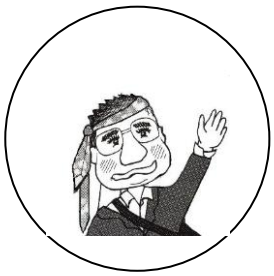
インド大魔王のエッセイ　273　　２０２６年１１月号

大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン　　ぽん子画

（530-0041）大阪市北区天神橋 1-18-25　第３マツイ・ビル 201　ＴＥＬ：06-6354-3011
お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。（E-mail：daimao@travelmitra.jp）

大物政治家 vs大宝天（だいほうてん）のカレー合戦 (3)

「エライことになった！」
（もしかして、あのカレー粉で石破さんがおなかを壊したのか・・・）
「今度、石破さんと対決をすることになった！」
　政治的対決かと思いきや、どちらのカレーが旨いか、カレー合戦をしようということになった。
　両者がカレーをホテルに持ち込み、地元の有力者が判定投票をするというわけだ。参加人数は十名から多くても十五名ほどだと言った。
（おもしろい！）
「わが輩も加えて！」と、即座に主張した。
　わが輩には参加の権利があると勝手に思った。大宝天は太っ腹なので、「おぉ、来いや」と快諾してくれた。ところで、大宝天はどのようなカレーを作るのか。
「わしはジビエを使ってカレーを作ろうと思っている」
　このレシピなら間違いなく「わしが勝つ」、と大宝天は思っているようだ。
「わしが勝つのはわかっているが、石破さんに勝たせないといけないかな・・・」
　などと忖度し始めた。大宝天の悩みを聞いたわが輩も、どちらに勝ち札を入れるべきかと想像してみた。おそらく物量対決では大宝天が勝つ。石破式カレーは日本風カレーであろう。勝利は大宝天にある。（そうだろうか?）

　いよいよカレー合戦の日（8 月 8 日）が近づいてきた。汽車の予約もしたので準備万端である。ところが思わぬことがおこった。７月２９日に奈良のテーラヴァーダ仏教の庵に行き法話と瞑想、次の３０日の夜に大阪・万福寺（浄土真宗）で編集会議に加わった。３１日の朝、急性腰痛症で激痛がはしり歩けなくなってしまった。８月１日整形外科でレントゲン検査をしたところ、脊椎がずれていることが判明した。２７年ほど前に、ビジャプル（カルナータカ州）で堺市の高校生と植林作業をしてギックリ腰になった部分が経年劣化していた。
「鳥取行はやめたら・・・」
　愛妻は心配して言ったが、わが輩は杖を突いてでも行くと決意していた。

何としても鳥取に行かなければならない。鳥取県とわが愛するオリッサ州（現オディシャ州）は、この秋に友好協定（11月）を結ぶことになっている。和歌山とマハーラーシュトラ州が相互協力（2013年）を結んでいるのはよく知られているが、島根・鳥取県もインドと経済交流を推進しようと「山陰インド協会」が設立（2013年）された。インド思想の大家中村元博士は島根県松江出身で、「中村元記念館」が開館されたことが契機となった。

中村元先生といえば「東方学院」が知られている。1973年財団法人東方研究会（現・公益財団法人中村元東方研究所）が開設した私塾のことである。わが輩は東方学院関西教室（山口恵照先生代表）の一期生であった。誰でも学ぶことができる。入学・進級試験がないので落第することもない。わが輩にとって最適な学院であった。

鳥取県とオリッサ州を結び付けたのは、「山陰インド協会」であるとは言い難い。ニキレーシュ・ギリ総領事が2021年に赴任してから関係が密になった。なぜなら、ギリ総領事がオリッサ州出身であったからである。もっと具体的にいえば、ギリ総領事が県庁を訪問（2024年4月6日）したときからである。総領事を県庁で出迎えたのは大宝天（1）とわが輩であった。その夜の「インド舞踊のいざない」マニプリ舞踊団の顛末については、大魔王のお笑いエッセイ（2024年5月号）をご覧頂きたい。

（注１）クヴェーラは富と財宝の神さま、仏教では北方を守る毘沙門天・多聞天となる、太鼓腹で財布と棍棒を手にしている。象の頭をもつガネーシャ神とともに庶民に親しまれている。わが従兄は宝製菓の会長なので「大宝天」と命名した。

「山陰インド協会」の特別顧問は、石破茂前総理、舞立昇治副大臣（財務省）、藤井一博参議院議員である。これらお三方がオリッサ州についてご存知だとは思えない。ならば、アピールのために、たとえ杖をついてでも鳥取にいかねばならぬ、とわが輩は思った。読者諸氏よ、わが輩の決意のほどをご理解いただけたでしょうか。

８月８日、わが輩は「はくと５号」で倉吉にむかった。

次は、アピールのために持参したものである。

①小冊子「オリッシー・ダンス・フェスティバルに寄せて」光田和伸著（日本語とオリッサ州の関係について）
②オディシャ州ダウリ丘物語　―アヒンサー（不殺生・非暴力）の聖地―（大麻豊）
③第2回東インド古典舞踊オリッシー・ダンス・フェスティバル（2026年11月3日）のフライヤー
④新刊インド大魔王の『インド的日常』（大麻豊著）

実は新刊『インド的日常』南船北馬舎を石破前総理に謹呈するつもりでいたが、印刷が間に合わなかった。表紙と帯のみ印刷できていた。そこでわが輩は考えた。同じ出版社の『実践・インドとのかかわり方』（1993年刊）本部隆一著に表紙と帯をつけて、あたかも新刊のごとくして、石破前総理にみせることにした。

さぁ、これで準備万端だ。倉吉駅から会場のシティ・ホテルまで徒歩10分程度である。あれれ、右腰下に痛みが走りだした。ホテルについたときの姿勢は、逆Ｌ型になっていた。それを見た大宝天が言った。

「どうしただぁ。まるで年寄りだがなぁ」

「まちがいない、もう爺さんです！」

わが輩は即答したが、早く座りたかった。座れば痛みが治まった。

まずはホテルにチェック・イン、それから会場（厨房付きの会議室）の下見に入った。

カレー合戦は午後六時より始まる。部屋でインド服に着替えて五時まで待機していた。まだ開宴まで一時間もあるが、会場でぽつんと一人待つことにした。インド式で待つことには慣れている。

早く入場してよかった。予想外のことがおこったからである。

次回に乞うご期待！